

『山形大学公開講座 山形の魅力再発見 報告集』、15-21頁(別冊)

紅花商業と東北

岩 田 浩太郎

(2003年12月発行)

山形大学都市地域学研究所・(財)山形県生涯学習文化財団

紅花商業と東北

山形大学人文学部総合政策科学科 教授
岩田 浩太郎

I 山形城下町の魅力は何か

江戸時代の山形は、東北地方に全国物資を供給する一大中継地として繁栄していました。山形城下町はいわば「商都」として、おそらく仙台北下町よりも商業を活発におこなっていました。仙台が東北経済の中心である現在の感覚からすると信じられないかも知れませんが、歴史の変動のなかで山形の経済的地位は大きく変化しているにとらえられそうです。

今日の松尾先生のお話しにもありましたように、最上義光が57万石の大領国にふさわしい巨大な都市として山形城下町を建設しましたが、その後の山形藩は繰り返される転封により幕末には5万石の小藩となります。家臣の数も減少しましたので、巨大な三ノ丸の内部は空き地だらけとなり、武家屋敷地は寂れた状態になりました。しかし、これをもって山形城下町の全体も衰退したと考えてはいけません。これからお話ししますように、武家地とは対照的に、町人地は紅花商業などにより東北有数の繁栄をみせていたと考えられるからです。武家地の衰退と町人地の繁栄——このコントラストのなかに山形城下町の発展のあり方が秘められているにとらえられます。

今日は江戸時代の山形城下町のなかでも第一級の巨大商人であった長谷川家を中心にとりあげ、東北各地を対象とした彼らの広域的な商業についてお話しし、どうして山形商人は活発な経済活動ができたのか、その条件について考えてみたいと思います。とくに紅花商業に注目して当時の地域活性化の諸条件について探り、山形の歴史の魅力についてお話ししたいと思います。

II 長谷川家の紅花商業

(1) ㊤長谷川家

㊤長谷川吉郎治家は、㊤長谷川家や㊤長谷川家の宗家（本家）にあたる家です。文化8年（1811）には十日町の借家人であったことが確認されていますが、その後急速に経営を発展させ大店となり、安政2年（1855）の『東講商人鑑』には「繰綿太物卸店」と出てきます。幕末には山形藩（水野家）の士格御用達筆頭となり、仙台藩御用達も務めた著名な商家です。三代目吉郎治（直則）は隠居別家して㊤長谷川家を興し、明治21年（1888）に第八十一国立銀行（山形銀行の前身）の頭取となりました。

(2) 東北にひろがる紅花集荷網

㊤長谷川家の経営の全体像については研究が進んでいません。しかし最近、宮城県柴田郡村田町の大沼悦子氏のご厚意により同家（正大沼正治郎家）の古文書調査を奥羽史料調査会のメンバーとともに実施するなかで、長谷川家の紅花取引の全貌をあきらかにする史料を分析する機会を得ました。幕末期に大沼正治郎は、㊤長谷川家の奥州産紅花の買い付けに協力し、また京都に滞在して長谷川家が上方に送った紅花の売り付け交渉を担当していました。そのため、正大沼家文書には長谷川吉郎治名の紅花取引帳簿が残されているのです。嘉永2年（1849）の複数の帳簿の分析により得られたデータを表1・2に示しました。㊤長谷川家の紅花取引の全体像についてお話しするのは今日がはじめてですが、その規模の大きさに驚かれると思います。

まず表1に、㊤長谷川家が紅花をどこから集荷したのかを示しました。同家はこの年、合計

18381袋の紅花（1袋に重さ500匁＝1875g分の干花を詰めた）を集荷したことが判明します。荷造りでは64袋（重さ120kg）で1駄とするので、合計287駄余となり、試算すると34トン464kgの総重量となります。幕末期の全国紅花生産量は2000～2400駄と推定されるので、全国生産量の12～14%に相当する膨大な量の紅花を集荷し上方へ出荷していたこととなります。おそらく当時、全国でも第一位の出荷量を誇る紅花商人として長谷川家は活躍していたと考えられます。

紅花の内訳をみますと、最上紅花（出羽村山郡生産の紅花のこと）・庄内紅花・武州紅花・常州紅花・奥州紅花からなり、全体の43%余を占める最上紅花につづいて奥州紅花が多い（36%弱）ことが特徴です。各地域の紅花集荷のあり方を調べると、最上紅花7949袋のうち5035袋は長谷川家が自ら手代などを派遣して山形周辺から集荷し荷造りしたものです。残りの2914袋は天神湯野沢（現村山市）・天童・楯岡周辺の仲買人合計5名が集荷した紅花であることが判明します。庄内紅花418袋は酒田の鏡屋惣左衛門（井原西鶴の『日本永代蔵』に出てくる積合問屋。酒田三十六人衆の一人。現在、屋敷は国指定史跡「旧鏡屋」として公開している）が仲買人として集荷し荷造りしたものです。武州紅花3256袋は与野・桶川（いずれも現埼玉県）の仲買人2名が集荷し出荷したものです。奥州紅花6535袋は南部紅花（南部産の紅花）や奥仙・南仙（それぞれ仙台の北域・南域）の紅花からなり、うち南部紅花が合計3364袋と過半を占めています。村田（現宮城県）の金大沼正七・冨大沼正治郎や舟岡（同県）の飯淵惣吉らが仲買人として集荷し出荷したことが確認できます。また、現在岩手県に属する山ノ目の鈴木屋庄左衛門、水沢の小沢屋平治・穀田屋七平、一ノ関の千葉新助らもこの時期に㊦の奥州紅花の買宿（仕入宿）であったことが他の史料から判明します。

とくに、長谷川家の奥州紅花の買い付けに際して村田の両大沼家が果たした役割は大きく、例えば翌嘉永3年（1850）の史料からは、山形・長谷川吉郎治→村田・大沼正治郎→水沢・穀田屋七平→才治ら7名、というルートで紅花買い入れ資金が渡され水沢周辺の紅花の集荷・出荷がおこなわれたことが確認できます。ここからは、大沼家が長谷川家による奥州紅花買い付けを仲買人（買宿）へ指示し資金融通の仲介をする役割を果たしていたこと、仲買人の下にはさらに小商人（才治ら）が存在し近在の生産者からの紅花買い付けをおこなっていたこと、などがわかります。おそらく水沢以外の各地の仲買人においても同様のネットワークがそれぞれ作られ、長谷川家は買い入れ資金の提供により東北および関東の一部に広域的な紅花集荷網を形成し自己の系列下に置いていたと考えられます。

表2は㊦長谷川家が上方へ出荷し嘉永2年9月～翌年6月の間に売却した紅花の代金を一覧にしたものです。京都紅花問屋10軒・大坂紅花問屋2軒に長谷川家の紅花が送られ、各問屋が京都西陣などの紅染め職人に売った代金は合計15470両余にのぼります。現在の貨幣価値に換算することは難しいのですが、大雑把に試算してみると約10億円前後の売り上げとなります。また、帳面を分析するとこの年の利益率は12%前後ですので、1億数千万円の純益を紅花取引から得た勘定となります。大きな利益ですが、紅花の利益は長谷川家の経営全体の利益の一部にしかすぎません。長谷川家は紅花のほかに、判明するだけでも生糸や青苧などを出荷し、上方から繰綿（精製せぬままの綿）や太物（麻織物・綿織物）などの帰り荷を東北で販売する「のこぎり商い」を大規模におこなっていましたし、東北をまたにかけて金融業を展開し、さらに山形周辺で地主経営もおこなっていました。紅花取引の規模については今回の調査であきらかになりましたが、㊦長谷川家の経営全体についてはまだ未解明で、わたしたちの想像を超える規模の社会経済活動を展開していたと思います。おそらく東北有数の経営規模を誇る巨大商人、今日の表現でいえば「巨大総合商社」であったと考えられます。

(3) 北廻り・西廻り・江戸廻り

㊤長谷川家は、紅花をどのようなルートで上方へ出荷していたのでしょうか。同家は以下の3つのルートを使用していました。

「北廻り」(最上川を下して酒田港から北前船に積み越前敦賀港へ陸揚げし、敦賀から琵琶湖北岸の塩津へ駄送し、塩津港から舟運で琵琶湖南岸の大津港まで運び、大津で陸揚げして京都まで駄送するルート)

「西廻り」(最上川を下して酒田港から北前船に積み、西廻り航路で下関を經由し瀬戸内海を通って大坂港まで運び、淀川などを使い京都まで運ぶルート)

「江戸廻り」(奥州街道を南下し下野国阿久津河岸から鬼怒川を舟運で下し、利根川を上り、江戸川を下し、江戸で廻船に積み替えて東廻り航路で大坂港まで運ぶルート)

同じく嘉永2年の帳面から分析すると、①最上紅花の大部分・庄内紅花・奥州紅花の一部は「北廻り」および「西廻り」を使用した、②奥州紅花の過半と武州紅花・常州紅花および冬場の最上紅花は「江戸廻り」を使用した、ことが判明しました。そして、①について「北廻り」と「西廻り」の内訳をさらに調べると、「北廻り」が25%余、「西廻り」が74%余となり、「西廻り」の方が圧倒的に多いことがあきらかになりました。従来の研究で確認された数多くの紅花商人の事例では、酒田港から出荷した紅花はほとんどは「北廻り」で運ばれておりましたので、長谷川家のこの実態はいわば常識をくつがえす発見となりました。

なぜ長谷川家が酒田港からの紅花の出荷ルートとして「北廻り」ではなく「西廻り」を多く選択したのかは、これからさらに検討したいと考えていますが、予測されることを指摘しましょう。1つは、大量の紅花を出荷した長谷川家の場合、北前船1艘あたりに積む紅花荷量が他の紅花商人と比較して多く(嘉永2年の場合、平均395袋=6駄余)、少々時間がかかっても積み替え時の荷損や運賃コストの面から「北廻り」よりも「西廻り」を選択した方が有利であったと思われることです。2つは、長谷川家の場合、帰り荷(上方商品)も「北廻り」ではなく、大坂から「西廻り」を使い大量輸送しており、紅花を陸揚げする大坂問屋が同時に帰り荷の船積みも担当しているなどの取引関係が背景にあると思われることです。

東北や関東の一部を覆う広域的な紅花集荷網を築いていたことは、㊤長谷川家ばかりでなく、同じく山形城下十日町の今佐藤利兵衛家でも確認できます。佐藤家の場合、最上紅花のほか、秋田藩領産の紅花(久保田〔秋田〕・横手・湯沢・今泉で集荷)や常州紅花(水戸)、奥州紅花(黒沢尻・一ノ関・中新田・村田・大河原)を集荷し上方・江戸に出荷していたことが確認できます。長谷川家や佐藤家をはじめ、幕末期に山形藩(水野家)の御用達になるような山形城下町の巨大商人は多かれ少なかれ奥羽にまたがる紅花商業を展開していたと考えられるのです。

Ⅲ 歴史のなかの「商都」山形

(1) 中継商業地としての山形

長谷川家は上方へ紅花・青苧・生糸などを出荷し、その売り上げで帰り荷(上方商品)を購入し山形をはじめ東北各地で売り捌く「のこぎり商い」をおこなっていました。この商法を「のこぎり商い」というのは、行きも帰りも儲ける商いの動きが、押すと引くを交互におこなう鋸の刃の運動に喩えられたことによります。こうした「のこぎり商い」は、上方に紅花を出荷する山形城下町商人はよくおこなっていました。表3に、確認できる主な山形城下町商人の帰り荷の商品名と販売先などを一覧にしました。㊤長谷川家や糸小嶋家(小嶋グループの本家)、三浦家(現山形銀行代表

取締役)など、今日にも続く旧家の名が見えますが、これら巨大商人・中堅商人が秋田・盛岡(南部)・仙台・米沢の各藩領や伊達・相馬(現福島県)へ進出し、上方商品の売り込みをおこなっていたことがわかります。なかには仙台に支店を設けている商人も確認できます。紅花の広域的集荷網が、同時に帰り荷の販売網として機能した場合も多くみられます。山形城下町商人が東北各地に帰り荷の販売網をつくり商圏をもっていたことは、今後の調査でさらに実態があきらかになると考えています。

江戸時代後期の山形城下町の繁栄ぶりを記した史料はいくつもあります。2つ紹介しましょう。

「山形町の儀は……町数三拾五ヶ町その外続きの在町もこれ有り、家数凡そ六、七千軒これある大場に付……村山郡の商人数より山形一ヶ所の商人は十倍も多く、勿論同所は至って都合宜しき場所ゆえ、奥州仙台辺、三春、白石、伊達郡、羽州置賜郡米沢、或いは越後最寄りの商人ども平常入り込み、諸品売買仕候土地柄……」

(天保十年漆山村大庄屋記録)

「山形城下至って繁昌に御座候間、凡そ近国の諸品悉く山形へ持ち出しそれより他国へ出し、又上方或いは江戸その外の諸品にても一旦山形へ着荷の上近国へ売り捌き相成り候儀に御座候」

(『山形経済志料』第一集)

前者の史料では、山形は城下35町の周辺部も町場化し、家数6000~7000軒もある大きな都市となっており、山形は(商業取引きをおこなうのに)極めて都合がよい場所であるため、仙台・白石(現宮城県)や三春・伊達(現福島県)、米沢や越後(現新潟県)近辺の商人が山形に来て諸商品を売買する土地柄となっている、と記されています。山形城下町商人が商品を近国へ持って行って売り捌いていたことは先に指摘しましたが、この史料からはさらに、南東北エリアを中心とした近国の商人が山形へ集まって来て活発に商業取引きをしていたことがわかります。後者の史料では、山形城下町は極めて繁盛している都市であり、近国の商品の多くは山形へ集荷されてから他国へ移出され、また上方や江戸からの商品もまず山形へ着荷してから近国へ販売される実態がある、と記されています。史料の表現にやや誇張もあるでしょうが、2つの史料はいずれも山形城下町が東北各地(とくに南東北エリア)に対する中継商業地であり、商品流通の一大センターとして繁栄していることを述べています。表3で示した山形城下町商人の近国への商業進出の動向もあわせて考えれば、当時、南東北エリアを中心とした広域的な商圏をもつ商業都市として山形は位置づいていたと考えられます。

また、前者の史料は山形城下町を家数6000~7000軒もある大きな都市であると指摘していますが、確かに5万石の小藩の城下町としては人口は多いといえます。すなわち、家臣の数は少なくなり武家の需要は少なくなっているのに城下町の経済活動は停滞せずに繁栄し、多くの町人が生活出来ていることが示されています。この背景としては山形が、武家の購買力(需要)に依存する都市から脱皮して、活発な民間経済にささえられた都市としての性格をもち発展するようになっていたことを指摘できると思います。東北各地と中央である上方を結ぶ(および東北内部の地域と地域を結ぶ)中継商業による繁栄が江戸時代後期の山形経済をささえていたと考えられます。

(2) 「商都」山形の条件

以前、わたしはこうした山形の東北における経済的な位置について市民の皆さんにわかりやすく表現するために、山形は上方物資を移入する「東北の玄関」である、と述べたことがあります。現在では少し大袈裟な表現であったと反省しておりますが、山形が唯一ではなくとも有数の東北にお

ける中継商業都市であるとする考えには変わりはありません。それでは、「商都」山形が生み出された背景・条件について以下にまとめてみたいと思います。

- ①「天下の台所」である上方と東北の交易は、北前船による海運が主流であり、江戸時代には太平洋側よりも日本海側が「表」であったという交通条件
- ②最上川の舟運により東北内陸部まで商品の大量輸送をしやすいという地理条件
- ③上方と直接取り引きの商業ネットワークを形成することができた特産物（紅花）生産地帯としての条件
- ④近隣国と比較して村山郡には大藩がなく、藩の統制も弱いため山形城下町商人は自由に経済活動ができたという政治条件
- ⑤近隣国に新興の紅花生産地帯が形成されたのに対応して、いち早く進出し、山形城下町商人の商業ネットワークを広域的にはりめぐらせることができた流通条件

とりあえず5点を指摘してみました。①～⑤にみるように、様々な要因が重なっていると考えます。①②で指摘した交通・地理条件は、今日のような発達した交通技術と道路網をもたない当時としては重要で、東北内陸部への中継商業地として山形が優位に立てる基礎条件となりました。また、③も重要です。上方が求める、あるいは上方へ売り込める特産物をもたない地域は、上方との間で大規模な「のこぎり商い」を展開することができませんでしたので、紅花による上方交易は決定的な意義をもっていたといえます。さらに、④が非常に大きな条件となりました。秋田藩や仙台藩などの大藩では、藩による専売制など経済規制が強くおこなわれ、藩領内の商人は商品の移出入を自由にできませんでした。それに比べて村山郡は幕領や小藩領が入り組み錯綜する状態で、山形藩の統制も弱く、(御用金は数度とられました)長谷川家をはじめ山形城下町商人はかなり自由に商品の移出入をおこない経済活動を展開できたといえます。こうした政治条件も「商都」山形の繁栄にとって無視できません。

(3) 山形の歴史と個性

最初に指摘しました武家地の衰退と町人地の繁栄という山形城下町の内部の対照的なあり様は、以上のような条件のなかで形成されたと考えています。明治維新の後、初代山形県令として赴任した三嶋通庸が明治9年(1876)以降に県都づくりを進めますが、それまでの藩政の中心であった城郭のなかに県庁を設けるのが普通であるのに、三嶋は町人地の中心部の七日町に洋館街をつくりそれに接続する寺社地に県庁(現在文翔館の地)を建設しました。この新都づくりも、衰退した武家地と繁栄する町人地という当時の山形の発展の状況をふまえたものであるといえます。

幕末開港により低価格の中国紅花が輸入され、またより決定的には明治10年代に西欧より化学染料が輸入されたことにより、国内紅花は大打撃を受け、紅花ネットワークを基軸とした山形の商業活動は転換を余儀なくされます。また、明治政府の太平洋側を中心にした港湾・鉄道づくりによる交通体系の変更も先の①②の条件を掘り崩し、中継商業地としての山形の地位を喪失させました。近代山形の商業は劣勢を強いられながらも力強く転換していくのですが、それについては別の機会にお話ししたいと思います。山形城下町の歴史というと、最上義光による大城下町の建設が誇らしげに語られることが多いのですが、最上氏時代は短く、また山形藩の規模も縮小してしまいます。その意味では、仙台の歴史を伊達氏や仙台藩に象徴させて語るパターンを山形に適用しない方がよいと考えます。むしろ、山形城下町は東北有数の「商都」として発展したという事実をふまえて、その歴史を探っていった方が山形の個性や魅力を発見できるのではないかと考えますがいかがでしょうか。

今日お話しさせていただきました㊤長谷川家は、「商都」山形を象徴する巨大商人として位置づけられます。今後もさらに山形城下町と商人の研究をつづけて、その活発な経済活動の実態について皆さんにお話しする機会を得たいと思います。

*まとめるにあたって、当日の講座と質問議論をもとに、元原稿の一部を加除修正しました。

(参考文献) 読みやすいものを選びました。

岩田浩太郎「紅花と全国商業－東北の玄関としての山形－」(山形大学広報誌『みどり樹』第4号、2000年6月 <http://www.yamagata-u.ac.jp/html/kouhoushi.html>)

岩田浩太郎「京と山形を結ぶ最上紅花－最上紅花と山形商人－」(横山昭男監修『図説 村山の歴史』郷土出版社、2003年3月)

表1 嘉永2年(1849)㊤長谷川吉郎治家の紅花集荷の実態

最上紅花		
内造り分(長谷川家自身が集荷した分)	5035袋	
天神湯野沢の川嶋屋権吉が集荷した分	540袋	
大町村の六右衛門が集荷した分	208袋	
天童の高木屋七兵衛が集荷した分	147袋	
青沼惣次が集荷した分	306袋	
鈴木屋長四郎と長谷川家が組合で集荷した分	280袋	
遅れて集荷し12月に出荷した分	1433袋	
	<u>7949袋</u>	43.2%
庄内紅花		
酒田の鑑屋惣左衛門が集荷した分	<u>418袋</u>	2.3%
武州紅花		
与野の山田屋幸右衛門が集荷した分	3086袋	
桶川の木嶋屋淺五郎が集荷した分	170袋	
	<u>3256袋</u>	17.7%
常州紅花		
水戸で集荷した分	<u>223袋</u>	1.2%
奥州紅花		
南部紅花	1636袋	
南部紅花で遅れて集荷し11月に出荷した分	1728袋	
奥仙紅花	1586袋	
南仙紅花で飯淵惣吉らが集荷した分	1585袋	
	<u>6535袋</u>	35.6%
合計	<u>18381袋</u>	100.0%
	(287駄13袋)	1駄=64袋

典拠) 嘉永2年「西為登紅花元揚調帳」(宮城県柴田郡村田町 ㊤大沼家所蔵文書)。

表2 嘉永2年(1849) ㊤長谷川吉郎治家の紅花売代金の実態

—嘉永2年9月～嘉永3年6月—

	取扱い紅花屋	紅花売代金		
		金	銀	
京都	最上屋喜八	7519両0分2朱	134匁1分3厘	
	綿屋勇藏	2986両0分2朱	17匁7分8厘3毛	
	古手屋長右衛門	1199両1分3朱		
	西村屋清九郎	1100両2分	23匁1分1厘2毛	
	近江屋喜七	657両2分2朱	9分8厘5毛	
	美濃屋忠右衛門	544両2分3朱	95匁0分6厘	錢730文
	伊勢屋理右衛門	366両3分2朱	12匁5分4厘9毛	
	伊勢屋源助・やさ	346両2分2朱	9匁1分1厘2毛	
	西村屋清左衛門	167両3分	3匁2分4厘4毛	
	岐阜屋八郎兵衛	120両2分	5分1厘2毛	
大坂	嶋屋清兵衛	382両0分2朱	41匁4分8厘5毛	
	木綿屋嘉兵衛	79両	5匁5分0厘9毛	
	12名 合計	15470両1分2朱	343匁4分8厘1毛 錢730文	

典拠) 嘉永2年「紅花売日荷得簿」(宮城県柴田郡村田町 ㊤大沼家所蔵文書)。

嘉永元年「仕切帳」(山形大学附属図書館所蔵京都紅花問屋最上屋文書)。

補注) 1 古手屋長右衛門の売代金については、一部に青苧代金を含む。

2 最上屋喜八の売代金については、嘉永元年「仕切帳」により補訂。

3 嘉永2年9月～嘉永3年6月までに上記の紅花屋が取り扱い売却が完了した紅花荷に限る。一部に嘉永元年に上方に送った紅花荷を含む。

4 当時、仙台村田の㊤大沼正治郎は在京し、㊤長谷川家の紅花売支配を担当していた。

表3 主な山形城下町商人の商圏 — 帰り荷 —

居住地/商人名	商 品	販売先(村山以外)	備考(出店など)
三日町 糸小嶋源兵衛	畳表・砂糖・小間物など	伊達	
四日町 全三浦権四郎	古着	秋田・仙台	
六日町 全市村清右衛門	呉服・小間物類など	仙台	仙台店・酒田店・京店
十日町 ㊤長谷川吉内	綿・蠟・呉服太物・古着	仙台・盛岡	
十日町 元吉田 利八	古着	米沢・仙台	
十日町 分村居 清七	綿・蠟・砂糖	仙台・伊達・相馬	仙台店
十日町 李西谷伊兵衛	蚊帳・麻布・呉服類	仙台・相馬	今佐藤利兵衛の店借
十日町 糸西谷清兵衛	〃	〃	〃

典拠) 小嶋家文書、『山形市史』『山形銀行百年史』、後藤嘉一『山形商業史話』など。